

平成 24 年度学習指導要領実施状況調査 教科等別分析と改善点 (小学校 総合的な学習の時間 (質問紙調査))

1. 今回の調査結果の特色

(1) 質問紙調査結果の概要

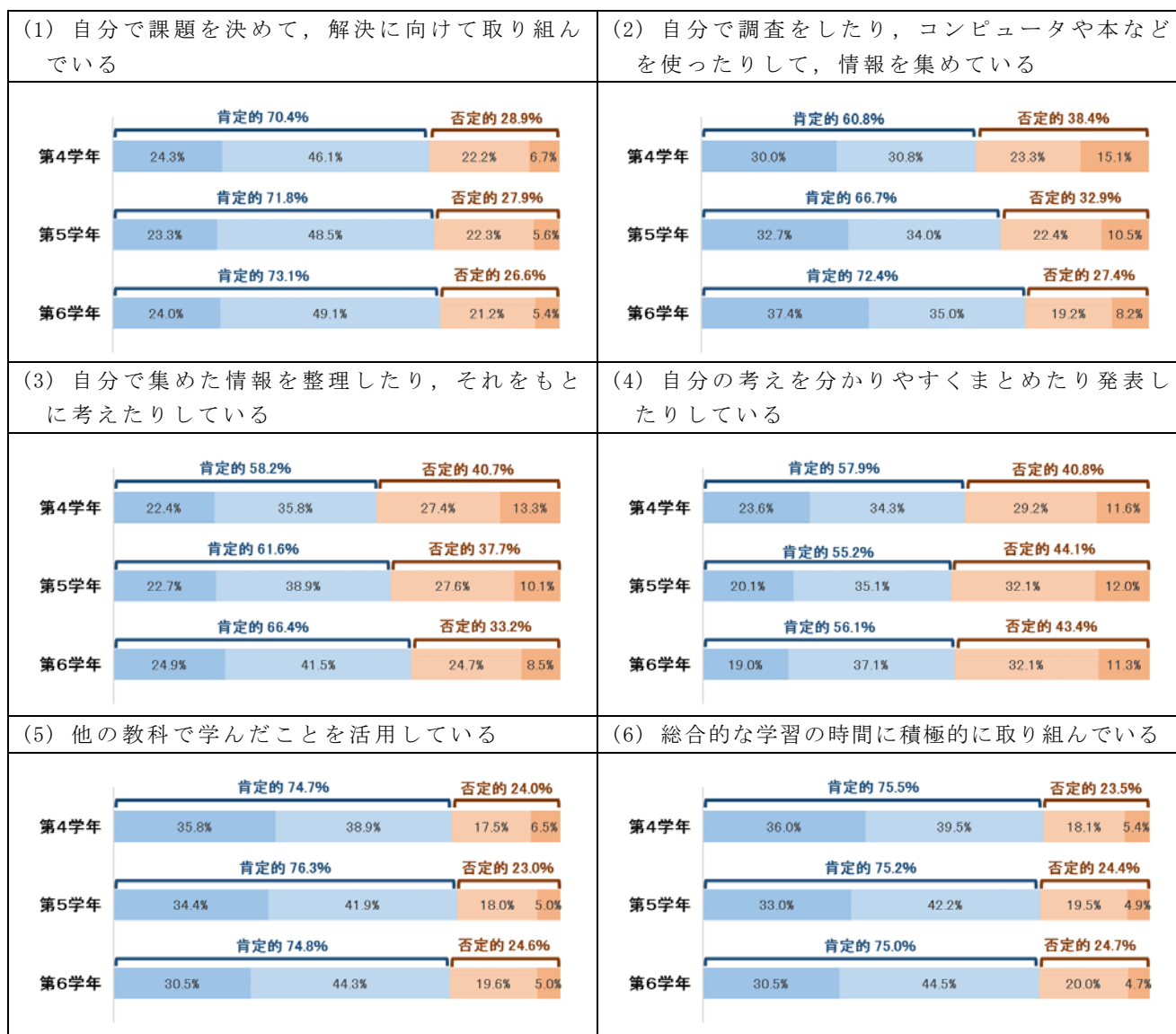
- ① 児童及び教師質問紙調査の結果と「音楽等質問紙調査」(平成 16 年度)との比較
- 児童質問紙調査
 - ・ 全学年において、全ての質問で肯定的な回答の割合が否定的な回答の割合よりも上回っている。
 - ・ 探究の過程に関する質問で、「情報の収集」、「整理・分析」においては、学年が上がるに連れて、肯定的な回答の割合が高くなっている。
 - ・ 「まとめ・表現」に関する質問においては、否定的な回答の割合が全学年で40%を上回っている。
 - ・ 今回の調査においては、「音楽等質問紙調査」(平成16年度)における類似の質問より、肯定的な回答の割合が上回っている。
 - 教師質問紙調査
 - ・ 全 9 項目中 8 項目で肯定的な回答の割合が否定的な回答の割合よりも上回っており、そのうち 7 項目では、80%を上回っている。
 - ・ 「児童の学習状況や評価」に関する質問においては、肯定的な回答の割合が、「音楽等質問紙調査」(平成16年度)における類似の質問を上回っている。
 - 児童質問紙調査と教師質問紙調査の関係
 - ・ 「整理・分析」、「まとめ・表現」に関する質問において、教師質問紙調査は肯定的な回答の割合が 90%を上回っているのに対し、児童質問紙調査では、肯定的な回答の割合が約 55%から約 70%にとどまっている。探究の過程における「整理・分析」、「まとめ・表現」の段階では児童と教師の意識に違いが見られるため、指導の工夫・改善が求められる。
- ② 児童質問紙調査の回答とペーパーテスト調査結果の相関
- ・ 総合的な学習の時間に関するそれぞれの質問において肯定的な回答をしている児童は、否定的な回答をしている児童に比べて、「思考力・判断力・表現力等」に関する問題の通過率が高い傾向が見られる。

(2) 質問紙調査の結果の概要

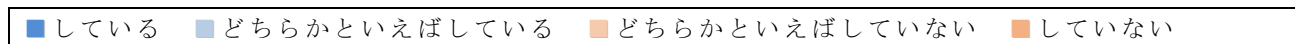
① 児童質問紙調査

- 総合的な学習の時間の取組状況について、児童質問紙調査（共通）大問2（以下、「児共」と示す）の六つの質問（図中は(1)から(6)で示す）で回答を求めたものである。児共(1)から児共(4)は、探究の過程（「課題の設定」→「情報の収集」→「整理・分析」→「まとめ・表現」）に対応している。

ア 児童質問紙調査の結果



※グラフの凡例



〈図1 児童質問紙調査における回答状況〉

- 全学年において、全ての質問で「している」、「どちらかといえばしている」という肯定的な回答の割合が、「していない」、「どちらかといえばしていない」という否定的な回答の割合を上回っている。
- 児共(6)「総合的な学習の時間に積極的に取り組んでいる」（以下、「児共(6)」と示す）においては、いずれの学年でも「している」、「どちらかといえばしている」という肯定的な回答の割合が75%を上回っている。

- 児共(2)「自分で調査をしたり，コンピュータや本などを使ったりして，情報を集めている」（以下，「児共(2)」と示す），児共(3)「自分で集めた情報を整理したり，それをもとに考えたりしている」（以下，「児共(3)」と示す）においては，学年が上がるに連れて「している」，「どちらかといえばしている」という肯定的な回答の割合が高くなっている。
- 児共(4)「自分の考えを分かりやすくまとめたり発表したりしている」（以下，「児共(4)」と示す）においてはほかの質問に比べて「している」，「どちらかといえばしている」という肯定的な回答の割合が低くなっている。また，「していない」，「どちらかといえばしていない」という否定的な回答の割合が全学年で40%を上回っている。

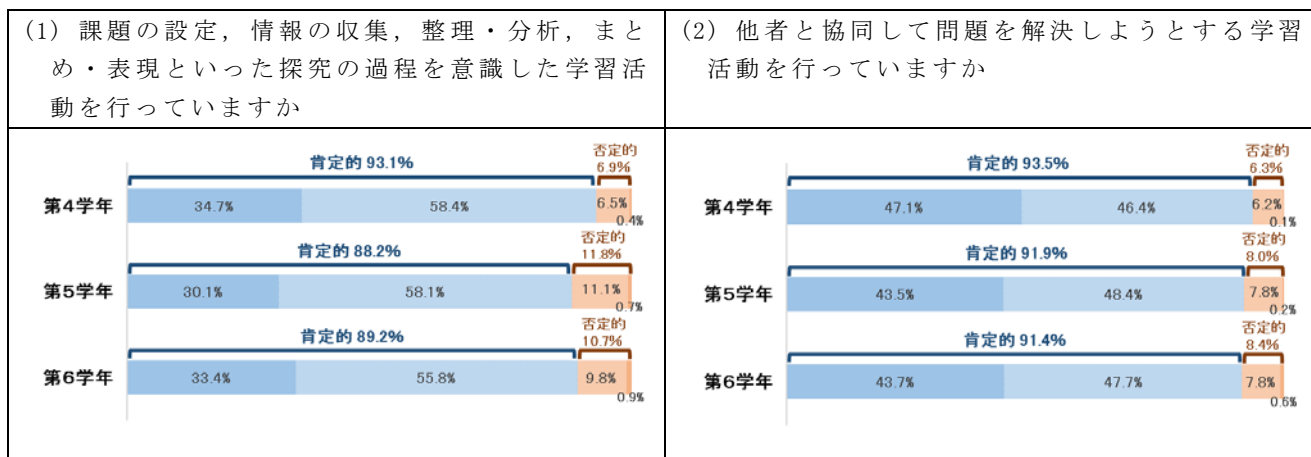
イ 「音楽等質問紙調査」（平成16年度）との比較

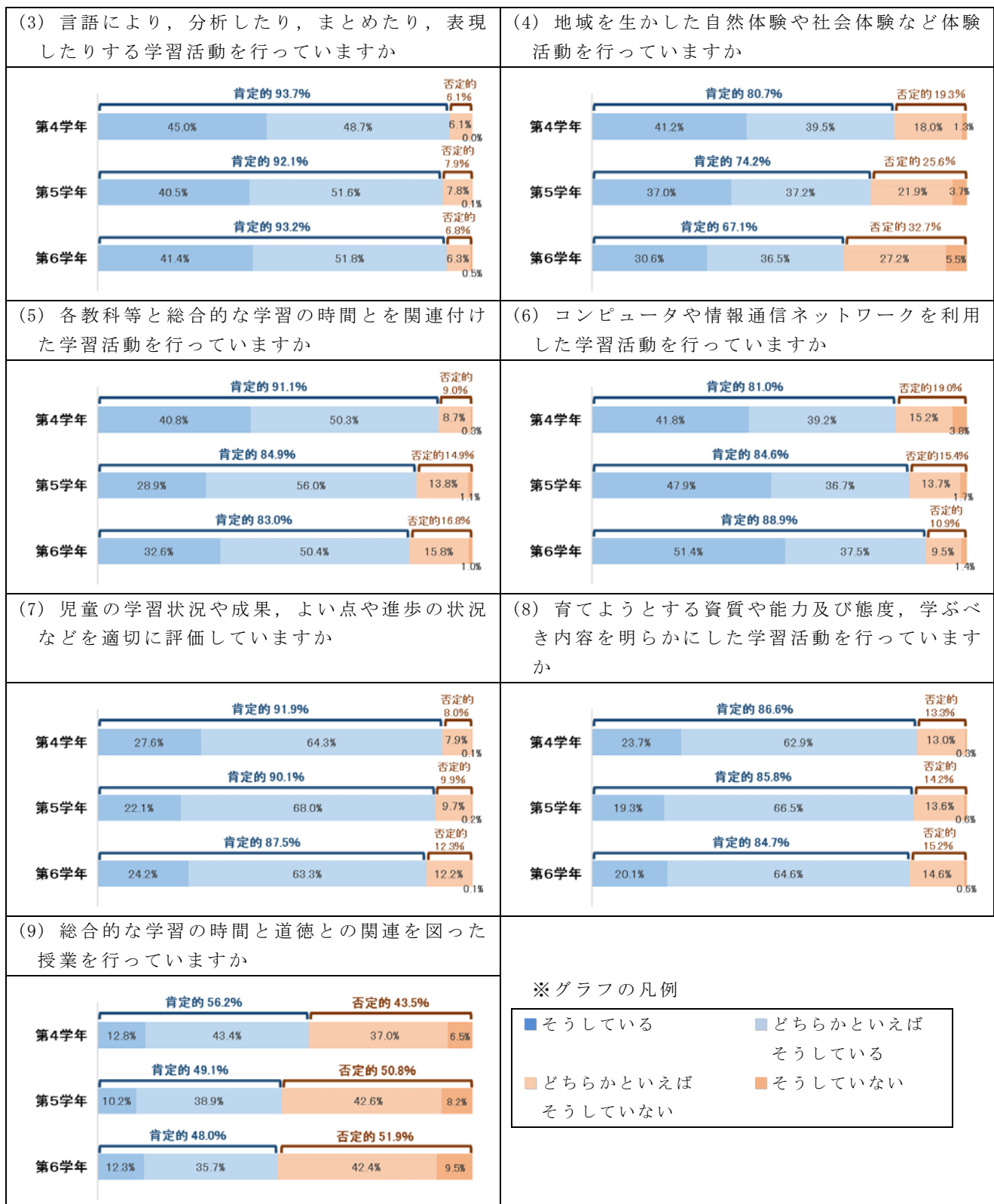
- 「音楽等質問紙調査」（平成16年度）は第6学年で実施しているため，今回調査での第6学年の結果と比較する（教師質問紙調査についても同様）。
- 「音楽等質問紙調査」（平成16年度）と類似した質問項目では，「音楽等質問紙調査」（平成16年度）と比べて「している」，「どちらかといえばしている」という肯定的な回答の割合が上回っている。
- 児共(1)「自分で課題を決めて，解決に向けて取り組んでいる」（以下，「児共(1)」と示す）においては，肯定的な回答の割合が73.1%であり，「音楽等質問紙調査」（平成16年度）の「課題を見つけること」（65.8%）に比べて「している」，「どちらかといえばしている」という肯定的な回答の割合を上回っている。課題の設定を意識した学習活動が行われ，児童が自ら設定した課題を解決する学習に取り組んでいると考えられる。
- 児共(5)「他の教科で学んだことを活用している」（以下，「児共(5)」と示す）においては，「している」，「どちらかといえばしている」という肯定的な回答の割合が74.8%であり，「音楽等質問紙調査」（平成16年度）の「教科で学んだことを総合的な学習の時間に生かすこと」（54.3%）に比べて，肯定的な回答の割合を上回っている。児童が各教科等で身に付けた知識や技能等を活用し，探究的な学習を展開していると考えられる。

② 教師質問紙調査

- 総合的な学習の時間における教師の取組状況について，教師質問紙調査（共通）大問3（以下，「教共」と示す）の九つの質問（図中は(1)から(9)と示す）で回答を求めた。

ア 教師質問紙調査の結果





〈図2 教師質問紙調査における回答状況〉

- 全9項目中8項目の教師質問紙調査で「そうしている」，「どちらかといえばそうしている」という肯定的な回答の割合が「そうしていない」，「どちらかといえばそうしていない」という否定的な回答の割合よりも多く，そのうち7項目では，全学年で80%を上回っている。
- 教共(1)「課題の設定，情報の収集，整理・分析，まとめ・表現といった探究の過程を意識した学習活動を行っていますか」（以下，「教共(1)」と示す），

教共(2)「他者と協同して問題を解決しようとする学習活動を行っていますか」(以下、「教共(2)」と示す)、教共(3)「言語により、分析したり、まとめたり、表現したりする学習活動を行っていますか」(以下、「教共(3)」と示す)、教共(7)「児童の学習状況や成果、よい点や進歩の状況などを適切に評価していますか」(以下、「教共(7)」と示す)では、「そうしている」、「どちらかといえばそうしている」という肯定的な回答の割合が85%を上回っている。

- 教共(4)「地域を生かした自然体験や社会体験など体験活動を行っていますか」においては、学年が上がるに連れて、「そうしていない」、「どちらかといえばそうしていない」という否定的な回答の割合が高くなっている。
- 教共(6)「コンピュータや情報通信ネットワークを利用した学習活動を行っていますか」(以下、「教共(6)」と示す)においては、学年が上がるに連れて「そうしている」、「どちらかといえばそうしている」という肯定的な回答の割合が高くなっている。
- 教共(9)「総合的な学習の時間と道徳との関連を図った授業を行っていますか」(以下、「教共(9)」と示す)では、「そうしていない」、「どちらかといえばそうしていない」という否定的な回答の割合が40%を上回っている。

イ 「音楽等質問紙調査」(平成16年度)との比較

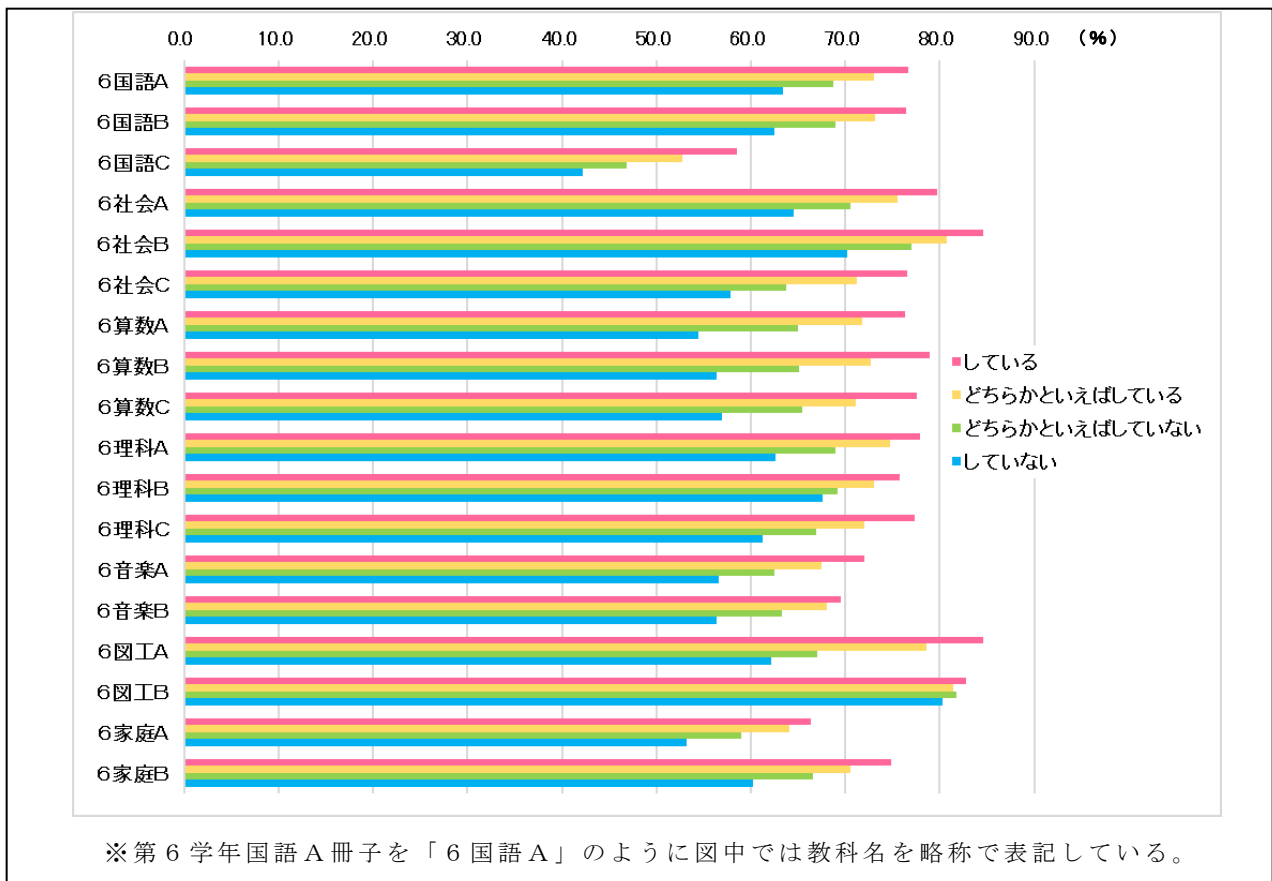
- 教共(7)においては、「そうしている」、「どちらかといえばそうしている」と肯定的な回答の割合が87.5%であり、「音楽等質問紙調査」(平成16年度)の「学習状況や成果、その児童のよい点などを評価するため、多様な評価方法を工夫していますか」の71.4%を上回っている。児童の姿を基にした適切な評価が行われていると考えられる。

③ 児童質問紙調査と教師質問紙調査の関係

- 「情報の収集」に関する児共(2)と教共(6)の回答状況を見ると、どちらも学年が上がるに連れて肯定的な回答の割合が高くなっている。
- 「整理・分析」に関する児共(3)、「まとめ・表現」に関する児共(4)と教共(3)の回答状況を見ると、教共(3)は「そうしている」、「どちらかといえばそうしている」という肯定的な回答の割合は90%を上回っているのに対し、児共(3)と児共(4)は、「している」、「どちらかといえばしている」という肯定的な回答の割合が約55%から約70%にとどまっている。探究の過程における「整理・分析」、「まとめ・表現」の段階では教師と児童の意識に違いが見られるため、一層の指導の充実が求められる。

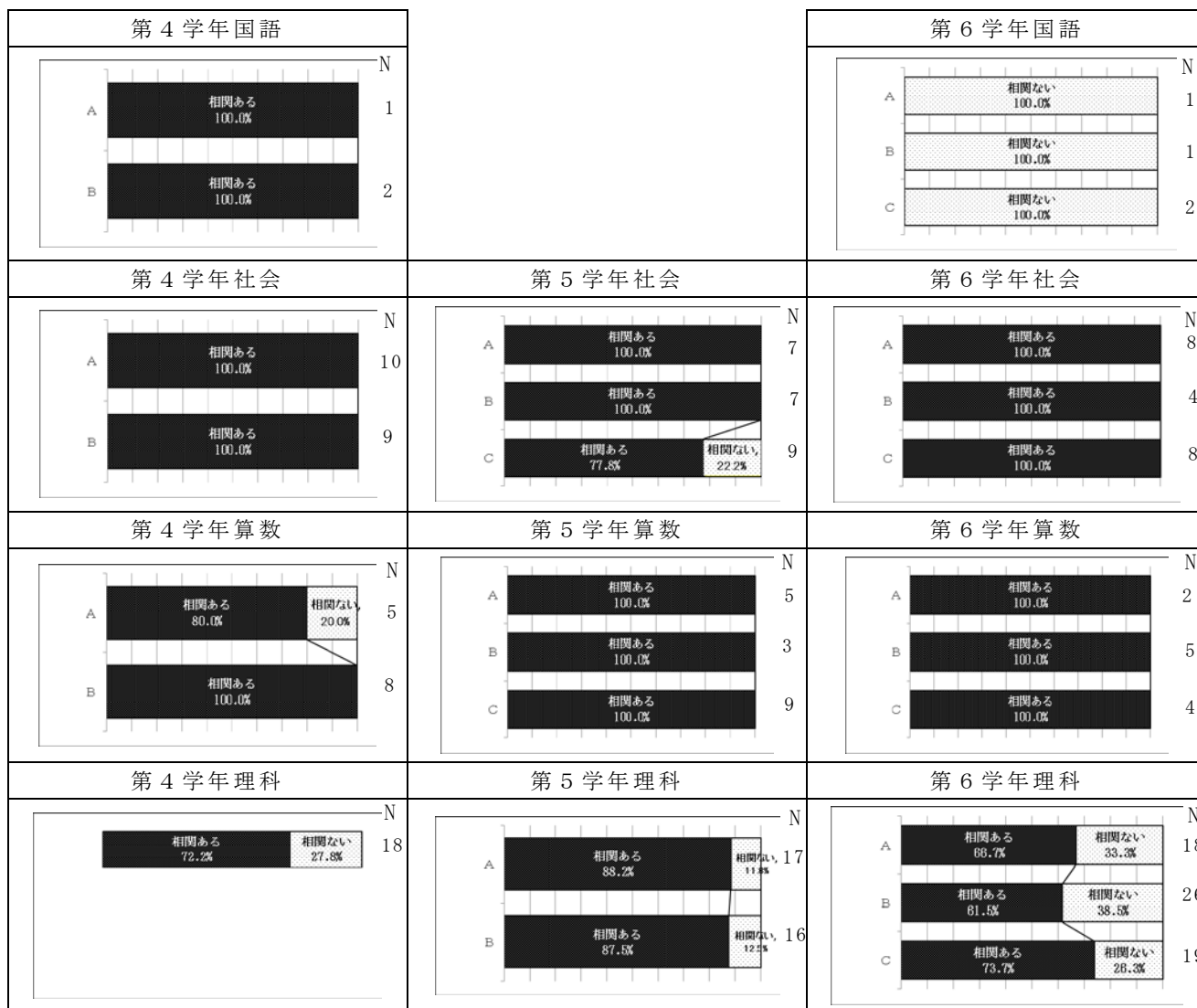
④ 総合的な学習の時間の取組と思考力・判断力・表現力等に関連する問題の解答状況との関係

- 児童質問紙調査の各質問項目における選択肢別の平均正答率を見ると、図3のとおり、第6学年の児共(1)では、肯定的な回答ほど平均正答率が高い傾向が見られる。また、ほかの学年や質問項目でも、肯定的な回答ほど平均正答率が高い傾向が見られる。



〈図3 児共(1)における選択肢別平均正答率の差(第6学年)〉

- 児童質問紙調査の回答と冊子別の平均正答率からも、総合的な学習の時間と各教科の学力に相関関係があるものと考えられるが、更に児童質問紙調査の回答と、ペーパーテスト調査の問題のうち「思考力・判断力・表現力等」に関連する問題の解答状況との関係を分析した。以下に示した分析は相関関係を示したものであり、必ずしも因果関係を示したものではないことには留意することが必要である。
- 児童質問紙調査の質問ごとに、「肯定／否定」と「通過／非通過」のオッズ比と95%信頼区間を求めることによって検定した。調査問題のそれぞれについて、質問ごとに六つのオッズ比と信頼区間が算出される。信頼区間において1を超えない範囲であれば、信頼度95%で統計学上、相関関係が確認できることから、総合的な学習の時間の取組と各教科に係る思考力・判断力・表現力等とは相関関係があるものと考えられる。各教科の詳細については後述するとして、ここでは全体的な傾向について述べる。
- 図4は、児童質問紙調査の回答と通過率に相関がある問題(それぞれの質問に対して行われた検定の全てで相関関係を確認できた問題を「相関がある」としている)の割合を示している。また、一つでも相関関係を確認できなかった質問がある問題は「相関がない」としている。



＜図4 各教科の「相関がある」、「相関がない」問題の割合＞

- 総合的な学習の時間に関する児共(1)から(6)において、「している」、「どちらかといえばしている」という肯定的な回答をしている児童は、「していない」、「どちらかといえばしていない」という否定的な回答をしている児童に比べて、「思考力・判断力・表現力等」に関する問題の通過率が高い傾向が見られる。特に、第4学年の国語・社会、第5学年の算数、第6学年の社会・算数の該当問題においては、全ての該当問題でその傾向が見られる。
- 六つの質問の中では児共(5)において、「相関がない」問題がほかの質問項目に比べて多く見られる。

ア 国語との関係

- ペーパーテスト調査のうち、評価の観点「話す・聞く能力」、「書く能力」、「読む能力」のうち、本調査において「思考力・判断力・表現力等」を問う問題に分類したものと、児童質問紙調査の回答との関係を調査した。
- 該当する問題数は、表1のとおりである。

＜表1 国語における各学年の問題数＞

	A冊子	B冊子	C冊子
第4学年	1問(16問)	2問(9問)	—
第6学年	1問(14問)	1問(8問)	2問(9問)

※()内は冊子の総問題数(以下同様)

- 総合的な学習の時間に関する全ての質問の回答と第4学年の該当する思考力・判断力・表現力等の全3問の通過率とで相関関係を確認することができた。すなわち、第4学年の全3問については、「している」、「どちらかといえばしている」という肯定的な回答をしている児童は、「していない」、「どちらかといえばしていない」という否定的な回答をしている児童に比べて、通過率が高い傾向が見られる。
- 相関関係を確認することができたものの中で、例えば表2のように、児共(2)の質問と4A□(一)（目的に応じて、中心となる語や文をとらえて、段落相互の関係を考え、文章を読むことができるかどうかを見る。）の問題の解答状況から総合的な学習の時間の取組と国語に係る思考力・判断力・表現力等との関係を見ると、探究の過程における「情報の収集」の学習活動と、資料からリーフレットなどに掲載する必要な情報を収集することが関係していると考えられる。

〈表2 児共(2)と4A□(一)の関係〉

児童質問紙調査項目番号 ※()内は4A□(一)と各質問におけるオッズ比と信頼区間を示している(以下、同様)。	4A□(一)の通過率	
	肯定的な回答	否定的な回答
児共(2) (オッズ比: 0.62 信頼区間: 0.54から0.72)	63.4%	51.8%

- 総合的な学習の時間に関する質問と思考力・判断力・表現力等の問題の通過率とで相関関係を確認できなかったものは表3のとおりである。

〈表3 国語における各学年の相関関係を確認できなかった問題数〉

児童質問紙 調査項目番号	相関関係を確認できなかった問題数				
	第4学年		第6学年		
	A冊子	B冊子	A冊子	B冊子	C冊子
児共(1)	0問	0問	1問	0問	0問
児共(2)	0問	0問	1問	0問	0問
児共(3)	0問	0問	1問	0問	0問
児共(4)	0問	0問	1問	1問	0問
児共(5)	0問	0問	1問	0問	2問
児共(6)	0問	0問	1問	0問	0問

- 総合的な学習の時間に関する全ての質問と6A□(二)（目的に応じて、物語を適切に要約できるかどうかを見る。）では、相関関係を確認できなかった。

イ 社会との関係

- ペーパーテスト調査のうち、評価の観点「社会的な思考・判断・表現」に関連する問題及び「観察・資料活用の技能」における記述式問題と、児童質問紙調査の回答との関係を調査した。
- 該当する問題数は、表4のとおりである。

〈表4 社会における各学年の問題数〉

	A冊子	B冊子	C冊子
第4学年	10問(50問)	9問(49問)	—
第5学年	7問(30問)	7問(27問)	9問(31問)
第6学年	8問(32問)	4問(29問)	8問(29問)

- 総合的な学習の時間に関する全ての質問の回答と該当する思考力・判断力・表現力等の問題（第4学年…A冊子：10問全問・B冊子：9問全問，第5学年…A冊子：7問全問・B冊子：7問全問・C冊子：9問中7問，第6学年…A冊子：8問全問・B冊子：4問全問・C冊子：8問全問）の通過率とで相関関係を確認することができた。すなわち，該当する問題については，「している」，「どちらかといえばしている」という肯定的な回答をしている児童は，「していない」，「どちらかといえばしていない」という否定的な回答をしている児童に比べて，通過率が高い傾向が見られる。
- 相関関係を確認することができたものの中で，例えば表5のように，児共(3)の質問と6B **1**(5)（文化や文化財，遺跡が保存・継承されることの意義を考え，文で表現できるかどうかを見る。）の問題の解答状況から総合的な学習の時間の取組と社会に係る思考力・判断力・表現力等との関係を見ると，探究の過程における「整理・分析」の学習活動と写真や文章などから必要な情報を整理し，社会的事象の意味を考えることが関係していると考えられる。

＜表5 児共(3)と6B **1**(5)の関係＞

児童質問紙調査項目番号	6B 1 (5)の通過率	
	肯定的な回答	否定的な回答
児共(3)（オッズ比：0.35 信頼区間：0.26から0.47）	91.7%	81.4%

- 総合的な学習の時間に関する質問と思考力・判断力・表現力等の問題の通過率とで相関関係を確認できなかったものは表6のとおりである。

＜表6 社会における各学年の相関関係を確認できなかった問題数＞

児童質問紙 調査項目番号	相関関係を確認できなかった問題数							
	第4学年		第5学年			第6学年		
	A冊子	B冊子	A冊子	B冊子	C冊子	A冊子	B冊子	C冊子
児共(1)	0問	0問	0問	0問	1問	0問	0問	0問
児共(2)	0問	0問	0問	0問	0問	0問	0問	0問
児共(3)	0問	0問	0問	0問	0問	0問	0問	0問
児共(4)	0問	0問	0問	0問	0問	0問	0問	0問
児共(5)	0問	0問	0問	0問	1問	0問	0問	0問
児共(6)	0問	0問	0問	0問	0問	0問	0問	0問

ウ 算数との関係

- ペーパーテスト調査のうち，評価の観点「数学的な考え方」に関連する問題と，児童質問紙調査の回答との関係を調査した。
- 該当する問題数は，表7のとおりである。

＜表7 算数における各学年の問題数＞

	A冊子	B冊子	C冊子
第4学年	5問（28問）	8問（28問）	—
第5学年	5問（27問）	3問（24問）	9問（28問）
第6学年	2問（27問）	5問（26問）	4問（24問）

- 総合的な学習の時間に関する全ての質問の回答と該当する思考力・判断力・表現力等の問題（第4学年…A冊子：5問中4問・B冊子：8問全問，第5学年…A冊子：5問全問・B冊子：3問全問・C冊子：9問全問，第6学年…A冊子：2問全問・B冊子：5問全問・C冊子：4問全問）の通過率とで相関関係を確認

することができた。すなわち、該当する問題については、「している」、「どちらかといえばしている」という肯定的な回答をしている児童は、「していない」、「どちらかといえばしていない」という否定的な回答をしている児童に比べて、通過率が高い傾向が見られる。

- 相関関係を確認することができたものの中で、例えば表8のように、児共(3)の質問と6A 12(1)（試合の対戦表から重なりを消す理由を、組合せの意味を基に考えている。）の問題の解答状況から総合的な学習の時間の取組と算数に係る思考力・判断力・表現力等との関係を見ると、探究の過程における「整理・分析」の学習活動と、具体的な事柄を整理する際に、図や表などを適切に用いて分析することが関係していると考えられる。

〈表8 児共(3)と6A 12(1)の関係〉

児童質問紙調査項目番号	6A 12(1)の通過率	
	肯定的な回答	否定的な回答
児共(3)（オッズ比：0.42 信頼区間：0.33から0.53）	87.6%	74.8%

- 総合的な学習の時間に関する質問と思考力・判断力・表現力等の問題の通過率とで相関関係を確認できなかったものは表9のとおりである。

〈表9 算数における各学年の相関関係を確認できなかった問題数〉

児童質問紙 調査項目番号	相関関係を確認できなかった問題数								
	第4学年		第5学年			第6学年			
	A冊子	B冊子	A冊子	B冊子	C冊子	A冊子	B冊子	C冊子	
児共(1)	0問	0問	0問	0問	0問	0問	0問	0問	
児共(2)	1問	0問	0問	0問	0問	0問	0問	0問	
児共(3)	0問	0問	0問	0問	0問	0問	0問	0問	
児共(4)	0問	0問	0問	0問	0問	0問	0問	0問	
児共(5)	0問	0問	0問	0問	0問	0問	0問	0問	
児共(6)	0問	0問	0問	0問	0問	0問	0問	0問	

エ 理科との関係

- ペーパーテスト調査のうち、評価の観点「科学的な思考・表現」に関連する問題と、児童質問紙調査の回答との関係を調査した。
- 該当する問題数は、表10のとおりである。

〈表10 理科における各学年の問題数〉

	A冊子	B冊子	C冊子
第4学年	18問（35問）	—	—
第5学年	17問（34問）	16問（31問）	—
第6学年	18問（48問）	26問（49問）	19問（40問）

- 総合的な学習の時間に関する全ての質問の回答と該当する思考力・判断力・表現力等の問題（第4学年…18問中13問、第5学年…A冊子：17問中15問・B冊子：16問中14問、第6学年…A冊子：18問中12問・B冊子：26問中16問・C冊子：19問中14問）の通過率とで相関関係を確認することができた。すなわち、該当する問題については、「している」、「どちらかといえばしている」という肯定的な回答をしている児童は、「していない」、「どちらかといえばしていない」という否定的な回答をしている児童に比べて、通過率が高い傾向が見られる。

- 相関関係を確認することができたものの中で、例えば表11のように、児共(4)の質問と6 B **6**(2)「食べ物が口の中で消化される温度条件に着目して、実験を考え、表現している。」の問題の解答状況から総合的な学習の時間の取組と理科に係る思考力・判断力・表現力等との関係を見ると、探究の過程における「まとめ・表現」の学習活動と、条件に目を向けながら生活経験を生かして推論し、自分の考えを表現することが関係していると考えられる。

〈表 11 児共(4)と6 B **6**(2)の関係〉

児童質問紙調査項目番号	6 B 6 (2)の通過率	
	肯定的な回答	否定的な回答
児共(4) (オッズ比：0.45 信頼区間：0.39 から 0.53)	65.6%	46.3%

- 総合的な学習の時間に関する質問と思考力・判断力・表現力等の問題の通過率とで相関関係を確認できなかったものは表12のとおりである。

〈表12 理科における各学年の相関関係を確認できなかった問題数〉

児童質問紙 調査項目番号	相関関係を確認できなかった問題数					
	第4学年	第5学年		第6学年		
		A冊子	B冊子	A冊子	B冊子	C冊子
児共(1)	2問	2問	0問	1問	5問	4問
児共(2)	1問	0問	0問	4問	3問	4問
児共(3)	1問	0問	1問	0問	4問	2問
児共(4)	2問	0問	1問	0問	3問	3問
児共(5)	2問	0問	2問	4問	7問	4問
児共(6)	1問	0問	1問	3問	7問	2問

- 総合的な学習の時間に関する全ての質問と6 B **4**(4)光・熱（身の回りの電気の利用について興味・関心をもち、エネルギーの変換の様子を推論し、表現している。）、6 C **3**(2)（てこのきまりを身近なてこに適用して、てこの働きを推論し、表現している。）、6 C **10**(3)（太陽と月の位置と月の見え方の関係について、モデル実験の方法を考え、表現している。）では、相関関係を確認できなかった。6 B **4**(4)光・熱については、関心・意欲を問う問題でもあり、100%に近い児童が正答していることも相関関係を確認できなかったことに影響していると考えられる。

2. 今回の調査結果を踏まえた指導上の改善点

(1) 活動や体験，実験や調査などで得られた情報を相互に結び付けて解釈する活動を充実すること

- 本調査では，児共(3)「自分で集めた情報を整理したり，それをもとに考えたりしている」の質問がほかの質問に比べ，肯定的な回答の割合が低いことから，総合的な学習の時間の学習活動において，活動や体験，実験や調査などで得られた情報を相互に結び付けて解釈する活動を行うことで，「整理・分析」の学習活動の充実を図ることが必要である。
- 例えば，収集した情報を目的に照らして吟味し，「比較・分類」，「関連付け」など，活用する思考スキルを明確に意識して，分析し，表現するなどの活動に取り組むことなどが重要である。

(2) 学んだことを統合してまとめ直し，表現する活動を充実すること

- 本調査では，児共(4)「自分の考えを分かりやすくまとめたり発表したりしている」の質問がほかの質問に比べ，肯定的な回答の割合が低いことから，総合的な学習の時間の学習活動において，学んだことを統合して，まとめ直し，表現する活動を行うことで，「まとめ・表現」の学習活動の充実を図ることが必要である。
- 例えば，学んだことをまとめ，表現する活動は，児童がそれまでの学びをもう一度自己の中で統合し，内容の定着を図る活動であること，自らの到達点を判断（評価）し，達成感や自己有用感を得る活動であることなどに着目し，メタ認知的に振り返ることを通して，学習の意義を再確認する活動に取り組むことが重要である。

(3) 思考力・判断力・表現力等の育成に向けて，各教科等との関連を図ること

- 本調査では，総合的な学習の時間の取組に関する児童質問紙調査の質問に肯定的な回答をしている児童の方が，各教科の思考力・判断力・表現力等に関する問題の通過率が高い傾向にあるという相関関係が明らかになった。
- 例えば，理科の観察・実験から得たデータと現象を関係付け，推論しながら話し合うことや，社会科の社会的事象を具体的に調査し，調べたことや考えたことを表現することなど，個々の教科等の思考力・判断力・表現力等と関連付けた統合的な学習活動を行うことが重要である。